

所属	看護学研究科 看護学専攻 修士課程 コミュニティ看護学分野	修了年度	平成 28 年度
氏名	栗林 敏子	指導教員 (主査)	糸井志津乃

論文題目	重症心身障がい児施設での実習教授行動
------	---------------------------

本文概要

【目的】重症心身障がい児実習施設で実習を行われている教員の実習教授行動の特徴を明らかにする。

【方法】全国の4年制の看護系大学、看護短期大学、3年課程の看護師養成所の障がい児実習担当の教員を対象とし、日本語版実習教授行動尺度（ECTB）と併せて自作の障がい児実習教授行動のアンケート調査をした。分析は、一元配置分散分析、相関を用いた。目白大学倫理審査の承認を得た。調査期間は平成28年3月～7月末。

【結果】回収数125名。重症心身障がい児施設での臨床経験のない教員は104名（83.2%）で教員経験5年以上の者が多かった。教員は障がい児施設での臨床経験はなくとも、過去の経験の中で障がいのある子どもとの関わりがある者が多かった。

教員の実習教授行動（ECTB）は「実践的な指導」「理論的な指導」「学習意欲への刺激」「学生への理解」について、どれも高得点でありバランスよく指導をしていた。実習教授行動で有意差が見られたのは学校種であり、大学教員が他の教育機関の教員より全体的に高得点であった。また、障がい児施設の経験の有無によって、理論的指導に有意に差がみられた。そして、教員の困難を抱えている指導として、援助内容があった。指導者は臨床指導者と役割分担をしながら指導を行っている現状が明らかとなった。障がい児実習教授行動で相関のみられた教員の特性は、学校種、教員経験、臨床経験、重症心身障がい児施設での臨床経験であった。

【考察】重症心身障がい児施設での臨床経験がなくても、一般の臨床経験と教員経験が5年以上あれば、障がい児実習教授行動がとれていた。このことは、教員が臨床場面での現象を教材化し学生指導に生かせることが考えられた。また、今回の協力していただいた教員のほとんどが過去の経験に障がい児との関わりがあったことも影響している。しかし、障がい児施設での経験のある教員の方が、理論的指導が高かったのは、今回の調査では十分な関連は不明であるが、障がい児への看護に関する内容についての理解の深まりに違いがあることが予測される。

教員が援助内容について困難を抱えている結果は、障がい児の複雑な病態や個別性によるものと考えられたが、実習指導者と役割分担をし、連携を図ることを心がけて実習教授行動を行うことで、障がい児実習教授行動をとっていることが示唆された。

自作の障がい児実習教授行動質問紙は、おおむね信頼性・妥当性がみられたが、今後も検討が必要である。

【結論】1. 教員は、障がい児施設での臨床経験が無かったが、過去に障がい児との関わりはもっていた。2. 教員は、「実践的な指導」「理論的な指導」「学習意欲への刺激」「学生への理解」の指導をバランスよく行っていた。3. 障がい児施設での臨床経験の有る教員は、無い教員と比べて「理論的な指導」に有意に差があった。4. 教員は、障がい児施設での臨床経験が無くとも実習教授行動がとれていた。5. 教員は主に記録指導と援助の振り返りを行っていた。また、教員が困難を抱いていた指導は援助技術であり、指導者と連携をとるように心がけていた。

【key words】：重症心身障がい児、小児看護学実習、教員、教授行動